

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 31 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24330192

研究課題名(和文) 父方祖父 - 父親 - 子の3世代間におけるアタッチメント関係

研究課題名(英文) Attachment relationships among three generations: Grandfather, father, and child

研究代表者

数井 みゆき (Kazui, Miyuki)

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：20282270

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、父方祖父、父親、および、子ども間のアタッチメントの関連性を明らかにすることであった。子どもにとっては、父母どちらでも、あるいは両方と、安定的なアタッチメントを発達させることが、後の様々な心理的発達にとって重要である。しかし、日本においては多くの場合、アタッチメント対象を母親とした研究がほとんどで、父親との関係を吟味したものは少ない。父方祖父、父親、母親、およびその幼児という1家族を単位とするデータ収集をおこなった。その結果、世代間における養育の(非)連続性には、成人としてのアタッチメントタイプが影響していることがわかった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the present study was to examine the attachment relationships among father-side grandfather, father, and child. We found adults attachment patterns mediated actual child-rearing behaviors. Although some grandfathers and fathers were experienced abusive parenting, if their AAI pattern was autonomous, they did not rear their sons and children abusively. Most of grandfathers' attachment patterns were suspected to be formed by several significant others like their grandparents, aunts and uncles, older siblings, and next door neighbors in addition to parents. Quite a few were reared by most of the time not by their parents. Those days, most of participants families were rather poor, and parents were too busy to spend time with their children. So children were left to other family members, relatives and neighbors. We could not collect enough numbers to statistically examine the associations between generations.

研究分野：教育心理学

キーワード：アタッチメント 男性世代間 父方祖父-父親 AAI AQS

1. 研究開始当初の背景

アタッチメントとは、乳児が恐れや不安の感情を養育者によって調整されることを繰り返し、その養育者との間で関係が成立することである。多くの文化や社会の中では、母親が第一養育者として子育てを担っている現実があるが、アタッチメントの本質は血縁に関係なく、あくまで関わり方の質によって規定される。父親と乳児とのアタッチメントの重要性をいち早く実証的な証拠をもとに報告したのは Lamb(1977)であった。その後欧米を中心にこの領域の研究は増加したが、日本においては実のところ父子間におけるアタッチメントを対象とした研究はほとんど見当たらず、筆者も母子間を中心とした研究を行ってきた (Nakagawa[Kazui] et al., 1992; 数井ら, 1996; 数井・遠藤ら, 2000)。ただ、父親を無視はしておらず、アタッチメント以外のデータで、子どものアタッチメントに寄与すると考えられている夫婦関係や親子ストレス、また、家族全般に関わる意識などの分析を行ってきた。その結果で、夫婦関係の調和度が高い場合であれば、母親の育児ストレスが高くて、母子間のアタッチメントが不安定になりにくいことを示した。

その後の欧米などでは、父子間のアタッチメント研究が大きく進んでおり、かなりの知見が蓄積されている(cf., Lamb, 2010)。それらをまとめ、次のようになる。両親ともにそろっている家庭において、生後1年間で乳児は父母に対して同じようにアタッチメントを形成する。ストレスフルな状況では、父親よりも母親へ6割弱の乳児は近接する。

父母に対するアタッチメントはそれぞれとの相互作用の歴史で決まり、乳児のアタッチメント・タイプの分布に父母間や乳児の性別での差異は見られない。夫婦関係が調和的である方が子どものアタッチメントは父母に対して安定的に形成される。父母両方に安定的なアタッチメントを形成している子どもは、幼児期や児童期などに社会的なコンピテンスが高い傾向にある。父親のストレスが高いと子どものアタッチメントは不安定傾向になりがちである。父親自身の成人のアタッチメントが安定していると、子どものアタッチメントも安定する傾向にある。

父親とのアタッチメントが安定的な幼児は、不安になりにくく、探索行動が活発で、知的な発達も良好である傾向にあった。

アタッチメントは生後2年間でもっともその発達が顕著であるが、そのときから積極的に関わり、応答的な父親を持つことは、長期的に子どもにとっては大きな心理的な基盤を得ることとなる。子どもが0歳代から始まったフィンランドの長期追跡研究では、親のどちらかが安定的なアタッチメント表象を持っていれば、子どもは前思春期の時期に、人間関係において問題を生じにくくなっていることがわかった(Kuovo & Silven, 2010)。一般的にも、父 息子関係の良好さは、息子

の情動的な健康さや関係性を取り結ぶ力を促進したり、さらに息子自身とその息子との関係性を良好にするように働くという(Floyd & Morman)。

また、アタッチメントが世代間で関連するという検証結果は、母子や父子という2世代の研究では多くても、3世代になると、祖母 - 母親 - 子という母系の関連が今のところ報告されているのみである(例、Benoit & Parker, 1994)。つまり、男系のアタッチメントの世代間連鎖については、世界的にも手付かずの状態なのである。母子間のアタッチメントにおいて、母親のアタッチメント表象が子どものアタッチメントを規定する最大の要因となっている。同様なことが男系のアタッチメントの世代間連鎖にも言えるのであるか。そこ着目し、男系の世代間に絡みうる様々な要因も分析に取り入れながら、男系アタッチメントを実証的に検討することは必須だと考えた。

2. 研究の目的

父母のどちらでもいいから、子どもが安定的なアタッチメントを発達させることができる対象が存在すれば、子どもにとって後の情動や社会性などが肯定的に育まれる大きな要因となる。しかしながら、日本においては、父子間のアタッチメントに焦点化した研究はほとんど存在していない。日本では母親との関係を社会文化的にも政策的にも重視してきたことと無関係ではないだろう。ゆえに、父親との関係を日本においても検証することは、子どもの育ちを両親がどのように保障するのかという観点からも重要である。よって、父子間のアタッチメントの本質を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 祖父と父母に対しては、アダルト・アタッチメント・インタビュー(Adult Attachment Interview:以下、AAI)を行った。さらに、祖父と父母には質問紙尺度で、夫婦関係、ストレス、仕事と家庭・育児に対する意識について尋ねた。

(2) 幼児に対しては、研究者及び研究助手が家庭訪問をし、母子だけ、父子だけの場面での相互作用を2時間ずつ観察し、そこから、アタッチメント Q ソート法(Attachment Q-sort:以下、AQS)を用いて、それぞれの親に対する幼児のアタッチメントを測定した。

4. 研究成果

本研究で最も困難であったことは、3世代そろったサンプルを収集することであった。結果として、全体で15家族の参加を得たが、質問紙だけだったり、祖父が入っていなかったりで、統計的に分析できる量が不足してしまった。そのため、質的な分析を進めた。

ここでは、本研究において最も重要な発見を中心にまとめていく。

まず、祖父世代と息子世代の両方において、AAI がそろっており、かつ、分析可能なペアを表に表した。祖父は 50 代～70 代で、息子は 30 代～40 代である。ここでは、4008 について、内容を詳しく説明していく。

表 祖父と息子の AAI 分類

ID	祖父	息子
4001	U/とらわれ型	U/軽視型
4002	U/とらわれ型	安定型
4006	安定型	安定型
4007	安定型	安定型
4008	軽視型	安定型
4009	U/とらわれ型	安定型
4010	安定型	安定型
4011	軽視型	安定型

<4008> 幸雄（祖父、仮名）はアタッチメント軽視型であるが、息子は安定自律型と分類されている。

幸雄の父親の養育は彼が「絶対権力」「怖い」と語るように、父が家にいるときはピリピリ張り詰め、また、父がテレビを独占するときは居間にはいらなかったという。母はやさしいが、父のことはまったく介入がなかった。別棟などに住み込みの職人がいたが交流はほとんどない。

跡取りの長男（兄）が父親から暴力を受けていたのを見ていた（たぶん、幸雄もされていたと思われる）。「男親とはこんなものなのではないか」としておくことで、自分の中で納得していた。

和夫（息子、仮名）への養育については、息子たちには手をよくあげた、悪さをしたらげんこをしたと語った。それは中学に入るまでであり、そんなにやっていないと本人は言うが、和夫は高校に入るまでやっていた、ひどかったという。

自分に育てられたことから和夫には、「自分は反面教師でしょう。あんなふうなことしたらいかん」という。

反省を語るが、男親はこういうものだ、というジェンダー観およびメンツがまだ強い。

息子の和夫は男児の双子として産まれた。その双子の弟と喧嘩をしたり、9つ下の妹を泣かせると、幸雄（4008 祖父）によるひどい暴力を受けた（双子の相手も同様に）。なぐる、ける、放り出す、どなるは、高校に入るまで続いた。たとえば、びんたされた跡が 2、3 日顔に残ったままだった（中学の時）。母親は全く介入していないし、場合によっては、母も別個に心理的虐待のようなことをしていた示唆がある。

ただし、和夫には、自分のアタッチメントニーズを満たせる場所が時系列的に複数存

在した。

・幼稚園～小 2 くらい：父親の会社の社宅で、となりの子どもいない夫婦のところに入りびたりっていた。遊んでもらい、楽しく過ごし、自分が大切にされていることを実感した。だんなさんがいるときには、3 人で楽しくゲームを行った。学校から帰ってきたときは、家にランドセルを置いて、この奥さんのところに直行して、とてもかわいがられたという。

・小学校の高学年から高校にかけて：引越すが、学校への道中に母方祖母の家（自宅から 10 分）があった。小学校時代は週に数回、中高となると毎日のように祖母宅で夕食を食べた。この時は双子の弟も一緒に、話好きのおばあちゃんが、いつも心配してくれる、と語った。

・双子の弟との支えあい：父親の暴力にあったときは、弟と一緒に愚痴を言い合う。なんでも話し合えた。つらいことも話すときりした。

幸雄自身の被養育経験は現在でいうなら虐待といってもおかしくない状況であった。幸雄のアタッチメントは軽視型であり、息子が小さいころには疑問をもたずに暴力をふるっていた。これは、虐待的な育児技法が連鎖していることを明確に示している。

幸雄には、このような DV 的な家庭の中での養育以外で、アタッチメントに影響を与えうるほどの他者による養育的なかわりが得られなかった。そのため、「男親とはこんなもの」ということで納得し、それは一家の長として仕事も大変な中、子どもをきちんと育てるのに必要なかわりだったという理解をしようとしていた。

母親に対しては、かなり感傷的な気持ちを強く持ってはいるものの、母親も一家を支えるための仕事などに大変忙しくて、なかなか、幸雄が望むようなかわりをしていない。父親がいないときに、幸雄を慰めたり、力づけたりするような様子は見られなかった。

幸雄の息子の和夫は、父親の暴力的な関わりの中で、外に関係性を求めることができ、語り全体としては安定自律型に分類された。しかし、意識的な部分での育児技法として、例えば、自分の子どもが複数回注意をしても言うことを聞かない場合には手を出していた。祖父のような過酷さは感じられないが、「こういうときにはこうするもの」という自動化が、多少は起きているのかもしれない。

ただ、和夫は自分の家以外の場所で、アタッチメントを安定的に育てる機会を持つことで、暴力や威圧を反射的に使うということはかなり少ないと推察できる。

まとめ

本来は、三世代（父方祖父-父親-子）というアタッチメントの連鎖について、統計的に

分析する予定であったが、それを可能とするだけのサンプル数を集めることができなかつた。この目的を満たせなかつたことは多いに反省すべき点である。しかし、祖父と父親という二世代で、男性のアタッチメントの世代間連鎖の分析を質的に報告している例はみないようである。このことを考えると、端緒としての本研究は大変意義深い。

特に、アダルト・アタッチメント・インタビューという手法は、本人が意識化している養育経験だけではなく、潜在的な内容も語りに出てくる手法である。そのため、知らず知らずに、回答者は養育の特徴を話している場合も少なくない。今回では、他の安定自律型の祖父について、本人がどう思っているかはともかく、父母以外からのかかわりが、結果として不安の調整となっており、アタッチメントが安定化していた。

また、安定かどうかに関係なく、ほとんどの祖父において、同居の家族と同時に、隣近所や別居の祖父母やその実家などが存在していた。そこにいる人々がごく自然に祖父の子ども時代に対応していたことが伺える。

アタッチメントそのものは、無意識領域でかなり働く要因なのだが、意識レベルに関わることで、養育において実際にどのような行動をとるのかという観点がある。たとえば、言うことを聞かないときはたたく、というようなことである。

この点での世代間の連鎖に関しては、祖父世代が体罰的な関わりをその父親から受けていても、祖父自身が安定自律型であると、自分の息子世代にそのようなかかわりをしていないことがわかつた。

アタッチメントの安定化、それは家族だけではなく、さまざまな人々が周りで部分的に参入することでも、十分可能であった。そのように育つた場合には、自分の子どもへのかかわりはずっと肯定的なものになることが検証された。

今後の課題としては、このことを量的にも検討することだと言えよう。

協力いただいた参加者には、心から感謝申し上げます。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

数井みゆき、アタッチメントの語りに見られる祖父と父親の(被)養育経験、茨城大学教育学部紀要(教育科学) 2017、印刷中、査読無。

元吉杏那・数井みゆき、家庭科保育領域において扱う児童虐待と子育て支援、茨城大学教育学部紀要(教育科学) 2017、印刷中、査読無。

[学会発表](計7件)

柳田美智子・数井みゆき・金丸隆大、中学生のアタッチメント・スタイルといじめ行動との関連、日本発達心理学会第28回大会、2017.3.26、(広島県・広島市文化交流会館) 査読無。

数井みゆき、父親と息子とのアタッチメントと養育に関する経験、日本発達心理学会第28回大会、2017.3.25、(広島県・広島市文化交流会館) 査読無。

M. Kitagawa, S. Iwamoto, M. Kazui, S. Kudo, H. Matsuura, T. Uemura. What element of the Circle of Security program is effective for children with different attachment category? The 15th World Congress of World Association for Infant Mental Health. 2016.5.30, Prague, Czech Republic, 査読有。

M. Kitagawa, S. Iwamoto, M. Kazui, S. Kudo, H. Matsuura, & T. Uemura. What element of the Circle of Security program is effective for caregivers with different attachment state of mind? 7th International Attachment Conference, 2015.8.7, New York, USA, 査読有。

M. Kitagawa, S. Iwamoto, & M. Kazui. Implication of the Circle of Security program to Japanese mothers and their children: Focusing on mother-child interaction, and mothers' attachment representation, 6th International Attachment Conference, 2013.8.30, Pavia, Italy, 査読有。

数井みゆき、臨床におけるアタッチメント理論の応用、日本心理臨床学会第31回秋学会、2012.9.15、(愛知県・愛知学院大学) 査読無。

数井みゆき・中尾達馬、発達とアタッチメントで考える「社会的ひきこもり」、日本心理学会第76回大会、2012.9.11、(神奈川県・専修大学) 査読無。

[図書](計3件)

数井みゆき(編著)、『男性の養育性』(仮) ミネルヴァ書房、240頁(予定)。企画中。

数井みゆき、アタッチメントQソート法、誠信書房、北川恵・工藤晋平(編著)、『アタッチメントに基づく評価と支援』印刷中、(2017年10月発刊予定)。

数井みゆき(編著) 誠信書房、『アタッチメントの実践と応用』、2012、235頁。

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称:

発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

研究者番号：
(4)研究協力者
なし ()

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

数井 みゆき (KAZUI MIYUKI)
茨城大学・教育学部・教授
研究者番号：20282270

(2)研究分担者

遠藤 利彦 (ENDO TOSHIHIKO)
東京大学・教育学研究科・教授
研究者番号：90242016

中島 美那子 (NAKAJIMA MINAKO)
茨城キリスト教大学・文学部・准教授
研究者番号：60571289

北川 恵 (KITAGAWA MEGUMI)
甲南大学・文学部・教授
研究者番号：90309360

工藤 晋平 (KUDO SHINPEI)
京都大学・学際融合教育研究推進センター・准教授
研究者番号：70435064

安藤 みゆき (ANDO MIYUKI)
茨城女子短期大学・保育科・教授
研究者番号：90612797

福田 佳織 (FUKUDA KAORI)
東洋学園大学・人間科学部・教授
研究者番号：10433682

西川 陽子 (NISHIKAWA YOKO)
茨城大学・教育学部・准教授
研究者番号：60303004

(3)連携研究者

なし ()